

子育てからみえた「ひと」と「まち」



— 随 想 —

日建設計コンストラクション・マネジメント株式会社

張 若平

1 子育ては女性の責任？

現代の社会では女性にたくさんの期待が課せられている。結婚・出産・育児に加え、就学・就職+キャリアアップ…働く場では女性活躍推進へ企業や団体が取り組んでおり、女性就職率は増えている一方、社会生活基本調査によると、女性の家事・育児は男性の約4倍と負担が集中している（図1）。多くの女性は職場復帰しても、ワンオペのダブルジョブ状態で、ワークライフバランスと恰好つけても、仕事・育児の双方へフル関与できない事に対して心残りや罪悪感を抱いている。

また、繋がり薄い環境の「孤育て」等が原因で、出産後1年以内に産後鬱を経験する女性が2割を超えるという。これは日本の文化的・社会的構造の影響もあるが、2人の我が子を育児しながら仕事を続けてきた私自身の体験ながら、女性が安心して子育てできるように、まちや建築が重要な役割を持って

いると実感する。

児童福祉法では、「すべて国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるよう努めなければならない」「国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う」とある。子ども達はまちやコミュニティに生まれ、その過程でまちの人々の心も育つと私は信じている。

現在では子育てを担う世帯が少数派となっている（（図2）「一般世帯総数・世帯累計の構成割合の推移」より）。また、日本は既に超高齢社会とされ、令和元年時の高齢化率28.4%が2036年には33.3%まで増加すると推計されている。

社会全体の課題解決は簡単でないが、ひとが幸福や生き甲斐を感じながら安心して生活できる「まち」の実現に、この随感を通して微力でも貢献できれば幸いである。

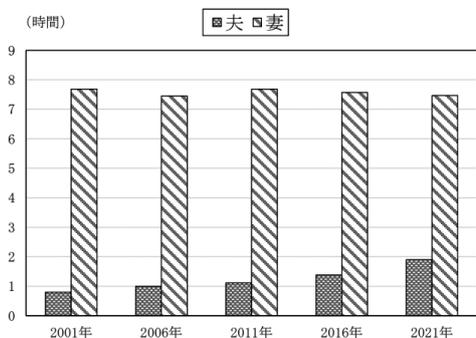


図1 6歳未満の子供を持つ夫・妻の家事関連時間の推移 (2001年～2021年) 一週全体、夫婦と子供の世帯

出典：総務省統計局「令和3年社会生活基本調査生活時間及び生活行動に関する結果」結果の概要

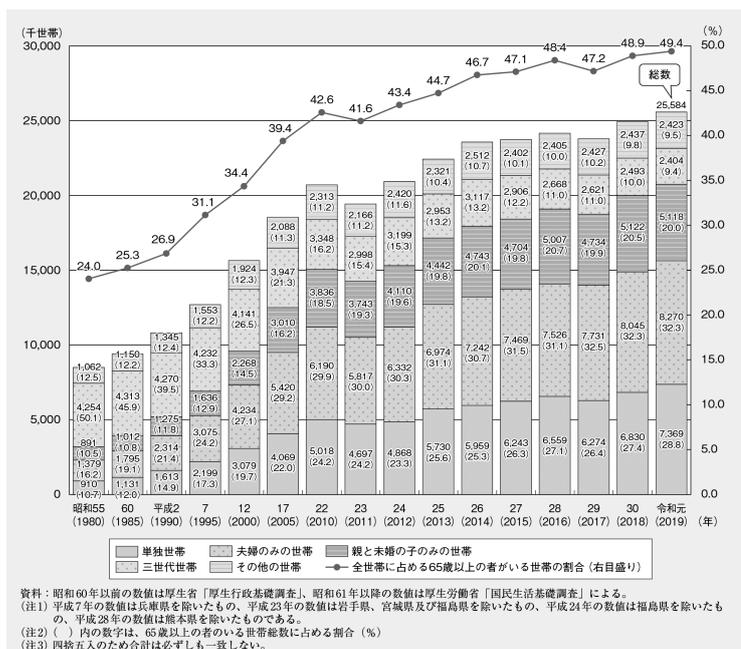


図2 65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合 (世帯構造別) と全世帯に占める65歳以上の者がいる世帯の割合

出典：内閣府「令和4年版高齢社会白書 (全体版)」

2 子育てをシェアする

家族やコミュニティで子育てを共有することは、皆にとって利点がある。

2010年、一人目の息子をフルタイムで仕事しながらシングルマザーで育てるといふ人生のチャレンジに対し、私は子育てしやすい街と評判の江戸川区を拠点地として選択したので紹介しよう。

- ・偶発的に人の交流が生まれる仕掛け：あらゆる公共の場（公園・広場・学校など）を活用し、地域の祭やフリマ等のイベントが催され、通りがかりも飛込参加自由で、にぎわう声に誘われ、交流の場へ引き寄せられる。
- ・安心できる遊び場の配置：車の多い大通りから一本入った道に面した公園。子どもは、公園という区画されたエリアの概念を超えて遊ぶ。公園外に飛び出したり、ボールを投げ出したり、公園に近づくだけで遊び場に入った気分ですぐに道を走り横切る。そこで、公園区画外の環境までが公園の一部として安全である。
- ・園庭以外の遊び場：周りの散歩道や公園までも保育の「場」として取り込まれている。子ども達から地域の大人に挨拶することで、大人も表情や心が和み挨拶する習慣を取り戻す。
- ・下町風の商店：息子が離乳食を卒業した頃から二人で週2は外食していた。そこで、個人商店には大型チェーン店とは違った人間関係を構築させる機能や帰属意識を生む魅力を感じた。子どもを連れていると、人同士の交流の潤滑油となり、店員と客の枠を超えた繋がり+客と客同士も接点を発生させる揮発材ともなる。また、地元のお総菜屋さんのお陰で、家事労力節減だけでなく、地域の人々へ愛着がわき、心のより所となる「店とまち」の繋がりもできる。
- ・子どもに寛容な低層住居：車通りの少ない路地に面した戸建てや低層アパートの住居エリアは子どもの交流や大人の井戸端会議に最適だ。「住」の場が公の場へ直接空間が広がり、子ども達も簡単にアクセスできる。ご近所様の関係性によって、子どもの安全を見守るという共通目的をきっかけに、コミュニティの結束も生じる。
- ・幼老複合施設の世代間交流：
息子を通わせていた保育園では多世代の相乗効

果により、子どもと高齢者の双方にメリットが生まれていた。(1) 子どもは人をいたわる気持ち・思いやりが芽生え、優しい心が育つ上、多様な知恵を大先輩から学ぶことができ、感性・知性ともに豊かになる。(2) 高齢者は小さな子どもと接する事で自然に笑顔が増える上、遊びや世話を通して脳と身体の活力向上が期待できる。更に、「必要とされる」自分の役割意識や存在価値を再認識し、メンタル面にも有効だ。(3) 親にとって、羨など子育てで困っている部分の助けとなる。豊富な助言や寛容な視線を得る切っ掛けとなり、育児ストレス軽減につながる。(4) ビジネスとして、利用者（幼・老）両方がケアを受ける側だけでなく、互いにケアギバーとして持ちつ持たれつで支え合える。これは、施設を整備できなくても、運営面で「赤ちゃん職員（北九州市）」など、面白い取り組みの例もある。子どもがシニアを見守り、孤独死の問題へも対応できるのではなからうか。

私が子育てを経験した地区の一例ではあるが、人口・家族構成・社会等の変容へ対して、全世代が助け合い、温故知新の心得でシニアと子どもの相乗効果を活かした地域共生社会が見えるまちの紹介をした。

3 ダイバーシティ&インクルージョン

最近では、SDGsや多様性が小学校でも教育されている。一方で、子どもの方が大人よりも寛容かもしれない。また、子育てからヒントを得て、大人のマインドが成長できると思う。

【ナショナルリティー】

多様性を感じられる場の例として、子連れでよく訪ねた台東区の上野恩賜公園がある。子どもが3歳頃からは行動範囲が拡大して電車やバスを利用するので、東京は都営一日券など交通インフラも利便性・経済性が備わっており有り難い。

上野公園では多国籍なイベントが催され、全世界人が出会い・にぎわい・交流ができる場所だ。海外からの観光客も多く、まち自体が多様性を受け入れ、区切ったり排除したりがない雰囲気がある。

「音環境」について、日本は海外から比べ「静か」な国であり、私自身が都会で子育てしていて困った

ことは「音」である。子どもにとって、思う存分に駆け回り、元気な声を出して喜怒哀楽を表現できる・自分の存在が受け入れられている場所が重要だ。公園内の移動空間においても、個人のショーやダンスが見受けられ、皆が音と行動の束縛から解かれることで、多様な背景の人々が自分の居場所を見つけられる。

【ジェンダー】

よく「男性は縦社会、女性は横社会。女性は交流が得意」と言われるが、コミュニケーションは一種のスキルでもあるので、男性の家庭および地域社会への貢献するための教育、または男性が交流しやすいまちの仕掛けを設ける方策も有効ではないだろうか。

以前、「けんせつ小町」という活動で様々な企画実施を行い気付いたことは、男女共同参画社会の実現には、ハードとソフトのバランスが重要だということである。可視化・数値化できる施設・設備面と同等に大事な要素のマインドこそに行動や結果を導く力がある。十年前の息子の保育園送迎では1割ほどが父親だった。今は娘の保育園送迎時に2～3割の父親を目にする。保育施設や住宅の街並みなどは変化していない中で、社会やひとに変革が生じている証拠だと感じる。

【The チャレンジド】

私は、カナダやイギリスへ留学していた際、授業外の社会奉仕活動が当たり前であり、障がい者キャンプや養老院ボランティアに参加していた。若くから日々の生活において多様な人と接する中で他人を受容できる心が培われていく。

日本の学校や職場では健常者と障がい者を区分する傾向があるが、息子の保育園ではメンタルや身体チャレンジを持つお友達が皆と一緒に生活していた。互いの「特徴」を子ども達同士が理解・認め合った上でフェアに関係性を築いているのだ。

多くのまちと施設のユニバーサルデザインでは、公平・自由度・簡単・情報理解・アクセサビリティ等に配慮し、この環境をスタンダードとして子どもは育つ。同様に大人も当前の「まち」のカタチとしてマインドセットを進化していきたい。

4 効率は誰にとって良いこと？

大人はよく「効率性・生産性・コスト削減」に踊らされる。一方で、子ども達の行動を観察すると、無意味だと思われる行動やら道草やら…大人の視点からは「無駄」ばかりだ。

昨今、職場のニューノーマルとして従来最善だったファシリティ効率性重視から、ウェルビーイングやコラボスペースが追及されてきており、「無駄」の定義は間違っていたのだろうか。実は、子どもの感性こそ、人にとって超リアルに必要なモノかもしれない。

【申請社会】

コロナを機に、子どもを遊ばせる色々な公共の文化施設（図書館、美術館、福祉系等）の使い勝手が不便になったと感じる。例えば、会員登録・予約・事前準備を経る過程は利用者にとって必要だろうか。管理側や特定の人が便利となり、利用者のハードルを上げてしまう。偶発的な出会いが生まれる機会や、違う世代との接点になる空間に柔軟な仕掛けを施すと、公共の交流の場として有効的だと思う。運用や経営面の工夫で、目的に沿って可変活用できるスペースへ計画・導入すれば、ニーズに応じてアジャイルに活用できる。例えば、公共のベンチは単に座って休憩する目的以外に、遊びや会話が生まれる機会があり、個々が使用目的をカスタマイズできる。

【金額に換算できない利益】

日本の企業は大多数が民間であり、企業はまちの形成へ直接的に関与する。雑草だらけで活用されていない民間の広い私有地がコミュニティー貢献できると思う。公共の福祉スペースに日本中の企業が奉仕すれば、結果として企業イメージ向上だけでなく、自らの生活においても恩恵を受けられる善良なサイクルが生まれるのではないか。

「One for All, All for One」…「ひとつの会社が皆のまちの為に行動を起こせば、皆が共通の目標に向かって更に素晴らしいまちへ育てていく社会」へ発展すると信じている。

【規律VS良識】

公園では置き去りにされた砂場グッズや小さな乗

り物玩具が見受けられる（下記写真）。誰にも所有されず、誰かに喜びを与えりサイクルされている。



施設やまちの中の利用方法について厳密なルールを付けせず、利用者によって自由な発想の元でアクティビティーが結果となって現れる形式が面白い。施設規制や敷地の内外区画が厳格だと気を遣って発想の転換が難しくなる。マニュアルが無い方が、人間は返って考える力が刺激され、ホスピタリティの創造を促すと思う。ここで、素直な五感で生きる子どもの視点は面白く、様々な発見を大人側が得られるだろう。無法地帯に設定することで、子どもが間接的にも直接的にも、まちの特徴や魅力を引き出すヒントを導いてくれるかもしれない。

【アート】

誰が教えなくとも、子どもは芸術家だ。我が子も道路にチョークでお絵描きして、まち空間を独創的に楽しんでた。日本の大人社会では、職場や街で芸術に触れる機会が少なくなる。明解な利益や有用性に繋がりにくいアートだが、創造力を育てるのみならず、治安改善としても採用されている。働く環境で心理的安全性が高い組織は離職率が低く、クリエイティブな会社は成長するとされている。同様に、まちもアートの導入により、安心して滞在できる環境や測れない感性を刺激して対話を生むことができる。

5 幸福度

日本は長寿大国である一方、幸福度においては先進諸国の中で最低である。この課題に対し、前述も含め、子育てを通じてひとが幸せな人生を育めるま

ちのアイデアをまとめる。

- ・共感：Commonとなる場で心の交流は生まれる
- ・少子高齢化の社会資源活用：人生のベテラン達が、未来の希望である子ども達と共存共栄し、全世代が健康と幸せを追求できる
- ・ウェルネス：日本は資源に恵まれた国であり、品質・自然・文化・おもてなしの人情を活かし世界中の人の心に潤いをもたらせる
- ・多様性を知り、大切にすることで、異なった者同士を繋げる場所と空間の整備を促進できる
- ・地域や社会と一緒に子育てを機に、コミュニティーの皆が主体的にまち創造へ参画できる仕組みづくり
- ・子育て＝ひと育て：様々な社会課題に子育てし易いまちづくりから解決の糸口がある

ひとにより「まち」が形成され、ひとが成長する事によりまちも進化していく。まちの魅力はそこに関わる人で付加価値が上がる。そして、まちという場所や環境からもまた、幸せのインスピレーションを得て、人のマインドやハートが育まれていくのではないだろうか。

●張 若平（ちょう わかえ）プロフィール●

1985年北京に生まれ、6歳で来日。高等学校はカナダへ留学し、卒業。2008年に筑波大学の工学部を卒業。大成建設(株)に初の総合職として建築施工管理で入社後、東京の建設現場および海外案件を経験。2020年から日建設計コンストラクションマネジメント(株)へ入社し、グローバルのプロジェクトで活躍。また、12歳の長男と1歳の長女を育てながら、働き方や女性活躍推進のチャレンジに全力投球している。